

## 序

平成24年度は「次世代に繋げてゆきたい魅力あるあなたの“まち”とは」をテーマとして、昨年7月から3ヶ月間(締め切り9月30日)、「学生論文部門」の募集を実施し、大学院、大学あわせて17編の応募をいただきました。今回は残念ながら最優秀賞に該当する論文がなく、優秀賞論文1編と佳作論文2編を選定しましたので、概要を紹介します。

### 1. 審査結果

- ・ 応募結果:17編
  - ※分野別:理工系14編、文系3編
  - ※学校別:大学院11編、大学6編
- ・ 審査結果
  - 最優秀賞:該当者なし
  - 優 秀 賞:1編
  - 佳 作:2編

#### ■優秀賞論文

- ・ 「災害大国で魅力あるまちを残すために～ふるさとを災害から守る～」  
佐藤 雄哉(長岡技術科学大学大学院)

#### ■佳作論文

- ・ 「地域知の活用・伝承による安心して暮らせるまちへの提案」  
石原 凌河(大阪大学大学院)
- ・ 「[生態系都市]の提案 「真の豊かさ」を求める自然共生都市モデル」  
波利摩 星也(東京理科大学大学院)

### 2. 審査方法と受賞論文

平成23年度のテーマは、その年の3月の東日本大震災の大災害を始め、災害が多発し、日本における防災・減災のあり方が問われていたことから、「今後の日本に必要な社会資本整備とは」でしたが、現在、日本は人口減少や少子高齢化の進展に加え、厳しい財政状況にあることから十分な社会資本整備も難しい状況となっています。このような状況を踏まえ、平成24年度のテーマは「次世代に繋げてゆきたい魅力あるあなたの“まち”とは」としました。

論文の審査は、審査員である当協会の広報委員会委員(11名)が行いました。審査基準をもとに最初に各委員がそれぞれ全ての論文を評価し、全員の評価結果を集計・整理し、広報委員会での最終審査会を経て、表彰論文を選出しました。応募校の内訳は、大学院7校\*、大学4校\*でした。地方別で見ると、東北(宮城)、北陸(新潟)関東(東京)、近畿(京都、大阪、兵庫)、四国(香川)から応募を頂きました。今回は北海道・中国・四国・九州地方からの応募はありませんでした。(※重複除く)

学科別で見ると理工系からの応募が14名で最も多く、文系から3名の応募を頂きました。

応募の動機については、研究室内や大学内に掲示されたポスターのほか、父親や研究室の教官、親族や知人からの紹介によるものが多くありました。

優秀賞論文1編、佳作論文2編の講評は次のとおりです。なお入賞論文は、建設コンサルタンツ協会のホームページの「論文募集コーナー」の「入賞作品一覧」に掲載されています。

<http://www.jcca.or.jp/achievement/article/index.html>

#### ■優秀賞論文講評

○佐藤 雄哉(長岡技術科学大学大学院)

「災害大国で魅力あるまちを残すために～ふるさとを災害から守る～」

機械分野の安全規格であるリスクアセスメントを適応させた土地利用計画と地域防災力を高めるソフトセキュリティとをテーマとして論じられているのが独創的であると評価されました。未曾有の大災害であった阪神淡路大震災、新潟県中越地震、東日本大震災等、自然災害による被害を完全に回避できないといったわが国の経験を鑑み、リスクアセスメントに住民を巻き込む重要性、行政と住民とが一体となって魅力あるまちづくりを推進する重要性について強く述べられていました。なお、リスク低減策について、まちづくりにどのように反映し、実践するか等の具体的な展開と結論があれば、さらに説得性を深めることができたでしょう。全体を通じて、オリジナリティのあるアイデアでの提案を優れた論理展開で記述されたことに審査員の評価は高く、優秀賞に値するものでした。

#### ■佳作論文講評

○石原 凌河(大阪大学大学院)

「地域知の活用・伝承による安心して暮らせるまちへの提案」

地域知を活用した災害拠点の設計や地域知の伝承による防災・減災という新しい切り口で書かれており、興味深い内容でした。また、具体的な実践例が多く挙げられており、災害教訓知だけでなく、地域で育ててきた伝統も含めて、地域の活性化に結びつける具体的な方策が

述べられていました。ただし、将来のまちを担うという意味で学校での授業に焦点を絞っていますが、それ以外での地域知への伝承方法のアイデアについても提案があれば、さらに論拠を深めることができたでしょう。また、図や表を活用することで説得性を高めることができたと思われま。課題はあるものの佳作受賞に値するものでした。

○波利摩 星也(東京理科大学大学院)

「生態系都市」の提案 「真の豊かさ」を求める自然共生都市モデル」

生態系都市というテーマがとても興味深く、「真の豊か

さ」を実現するための方策が具体的に示されてきました。都市への農業の導入は既に行われているところがありますが、生態系都市モデルの試算がしっかりできており、自然環境の回復まで展開されている点が高く評価されました。なお、東京圏が近郊農地に依存している現状を分析し、どのような生態系都市が望まれるかを論じていれば、さらに提案力と実現性を向上することができたでしょう。また、実施に際しての法規制、担い手などの課題についても整理が必要かと思われま。いくつかの課題はあるものの佳作受賞に値するものでした。

(広報委員会)

